

これまでの指摘事項について

平成 23 年度第 1 回汽水湖汚濁メカニズム解明調査ワーキンググループの指摘事項

○ 斐伊川連続調査結果について

指摘事項	対応
17 ページの下図について、前回調査と比べて今回の冬季に硝酸の濃度が大きく離れて高いところがあるが、中国大陸由来の窒素雨の影響によるものか。雨との比較検討等はどうか。(石飛委員)	冬場の雨の硝酸濃度が年々上昇する傾向が見られることから、大陸由来の可能性が考えられる。(資料 2-1 参照)
TN について、同じ流量でも夏季の負荷量は低く冬季は高いことになる。このような場合、1 本の L-Q 式では不十分だと思う。(石飛委員)	流量確定後、流量分布等を勘案し、複数の式の算出が良いかどうか検討する。
TOC について、実測値と L-Q 式の値が随分違うので、1 本の式でよいのか検討が必要と思う。(清家委員)	
N と P の流入負荷量が増えている原因等について確認したい。(吉田委員)	
1980 年代後半に実施した同様の調査の結果も加えた 3 つの調査結果を並べて示し、解析して欲しい。(清家委員)	1983~1984 年当時に比べ、TN や硝酸濃度は増加したが、TP やリン酸濃度に顕著な差は見られなかった。(資料 2-2 参照)
21 ページの下図、左側の高目に外れた点について、データを再確認したらよいと思う(石飛委員)	データ精査の結果、浚渫工事影響によるものであり、欠測とする。

○ 宍道湖湖心カロテノイド測定結果について

指摘事項	対応
カロテノイドの濃度というのは、一つの細胞あたり大体同じような濃度と考えてよいか。(山室委員)	カロテノイドの濃度は、ほぼ生物量に比例する。

○ 宍道湖毎週調査結果概要について

指摘事項	対応
42 ページのグラフについて、12 月の初旬から中旬にかけて、アンモニアとか硝酸の分布が、がらりと変わり増えている。その原因について、斐伊川からの流入による旨の説明があったが、EC が高いままだが、本当にそうなのか。(中村委員)	宍道湖の硝酸濃度の上昇は、斐伊川の濃度上昇と湖内の生物活性低下の影響と考えられる。アンモニアは湖内での無機化による可能性がある。(資料 2-3 参照)

指摘事項	対応
43ページの図について、溶存態について示し、かつ斐伊川の濃度ではなく負荷量で示し、かつカロテノイドかクロロフィルの濃度変化について示し、それらを比較すると良いと思う。(石飛委員)	夏季から秋季においては、流入負荷量よりも溶出負荷量が多いことが推測できた。(資料2-4参照)

○ その他

指摘事項	対応
65ページの上部の写真について、「ミクロキステイス _{sp} 」と「ミクロキステイス イクチオブラーベ」が逆だと思われる。(大谷委員)	指摘のとおりであり、修正した。(資料2-5参照)

平成22年度第2回汽水湖汚濁メカニズム解明調査ワーキンググループの指摘事項

○ プランクトン調査結果について

指摘事項	対応
プランクトンの炭素量(増減傾向など)について気になる。(中田委員)	(資料2-6参照)

○ シミュレーションモデルについて

指摘事項	対応
全りんの収支について、底質からの溶出量が少ないと思う。詳細について確認したい。(清家委員、中田委員)	(資料2-7参照)